

神代の始まりの事

1 日域・秋津島ともに日本の意味。

2 「日本書紀」によると、天地開闢とともに現れた神。以下、伊弉諾尊・伊弉冉尊まで、高天原に住んだといわれる十一柱七代の神々およびそれらの神々の時代を天神七代という。国常立尊、国狭穗尊、豊斟尊、土煮尊、沙土煮尊（以下、一対二神で一代）大戸之尊、大戸之尊、伊弉諾尊・伊弉冉尊。伊弉諾尊・伊弉冉尊は、天神七代の最後の神として、国土と諸神を生んだという。3 天照大神、天忍穗耳尊、瓊杵尊、彦火々出見尊、鸕鷀草不合尊の五柱の神々およびそれらの神々の時代を地神五代といひ、天神七代と人皇の間に位置する。4 第一代天皇。5 底本「みこと」。他本により改める。6 天下の君主。7 真名本に、「国土を治め給ふに二つの道あり。即ち文武の二道これなり。『平治物語』上・信頼信西不快の事にも類似表現がある。ただし、底本をそのまま訳すと、国を滅ぼし民を恐れさせる計略は文武二道である。となる。8 学問や芸術を好む人々。9 勇猛で武勇に秀でた人々。10 唐朝第二代皇帝。11 漢朝初代皇帝。劉邦。12 第五十六代清和天皇の皇子貞純親王から源氏が分かれた。後胤は子孫。13 第五十代桓武天皇の皇孫高望王から平氏が分かれた。累代は代を重ねること。14 底本「皇子」。他本により改める。15 合戦のさまを表す。

曾我物語 巻第一

神代の始まりの事

それ日域秋津島は、これ国常立尊より事おこり、泥土煮・沙土煮、男神・女神とあらはれ、伊弉諾・伊弉冉尊まで、以上天神七代にてわたらせ給ひき。又、天照大神より、彦波瀲武鸕鷀草不合尊まで、以上地神五代にて、多くの星霜を送り給ふ。しかるに、神武天皇と申し奉るは、葦不合の御子にて、一天の主、百皇にもはじめとして、天下を治め給ひしよりこのかた、国土を傾け、万民の怖るる謀、文武二道にしくはなし。好文の輩を寵愛せられずは、誰か万機の政を助けん。又は、勇敢の輩を抽賞せられずは、いかでか四海の乱れを鎮めん。かるが故に、唐の太宗文皇帝は、傷を吸ひて戦士を賞じ、漢の高祖は、三尺の剣を帯して諸侯を制し給ひき。然る間、本朝にも、中頃より、源平両氏を定めをかれしよりこのかた、武略をふるひ、朝家を守護し、互ひに名将の名をあらはし、諸国の狼藉を鎮め、すでに四百余回の年月を送り畢んぬ。これ清和の後胤、又桓武の累代なり。然りといへども、皇氏を出でて、人臣に連なり、鎌を嚙み、鋒先を争ふ心ざし、とりどりなりとかや。

